

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 第64号

高塚山第1・2号古墳発掘調査報告書

1987

財團法人 広島県埋蔵文化財調査センター

高塚山第1・2号古墳発掘調査報告書



1987

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

例　　言

1. 本書は、昭和61年度に実施した県営神石地区広域営農団地農道整備事業に係る高塚山第1・2号古墳（広島県神石郡神石町大字永野字高塚山1956-3, 2715-3）の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、広島県福山農林事務所から委託を受けて財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。
3. 発掘調査及び整理作業は、恵谷泰典・辻 满久が行い、執筆・編集は辻が行った。
4. 本書に掲載した第1図は、建設省国土地理院発行の25,000分の1（福永）の地形図を使用した。
5. 本書に使用した方位は、磁北である。
6. 図版と挿図の遺物番号は、同一である。
7. 須恵器は、断面を黒ヌリにした。

目　　次

1. はじめ	(1)
2. 位置と環境	(2)
3. 遺構と遺物	(5)
(1) 調査の概要	
(2) 高塚山第1号古墳	
(3) 高塚山第2号古墳	
4. まとめ	(19)

挿図目次

第1図	周辺遺跡分布図 (1:25,000)	(3)
第2図	高塚山古墳群位置図 (1:4,000)	(4)
第3図	高塚山第1・2号古墳周辺地形図 (1:1,000)	(5)
第4図	第1号古墳墳丘測量図 (1:200)	(6)
第5図	第1号古墳墳丘断面図 (1:100)	(7)
第6図	主体部実測図 (1:40)	(8)
第7図	出土遺物実測図(1) (1:3)	(9)
第8図	出土遺物実測図(2) (2:3)	(9)
第9図	第2号古墳墳丘測量図 (1:200)	(10)
第10図	第2号古墳墳丘断面図 (1:80)	(13)
第11図	第2号古墳石室天井石及び掘り方実測図 (1:60)	(14)
第12図	第2号古墳石室実測図 (1:60)	(折込)
第13図	出土遺物実測図(1) (1:3)	(16)
第14図	出土遺物実測図(2) (1:2)	(17)

図版目次

図版1	a. 第1号古墳調査前 (北西から) b. 同上 古墳墳丘 (北西から)	図版5	a. 第2号古墳天井石 (北西から) b. 同上 古墳奥壁 (南東から)
図版2	a. 第1号古墳主体部 (南東から) b. 同上 古墳調査状況 (北西から)	図版6	a. 第2号古墳天井石除去後 (南東から) b. 同上 古墳側壁・奥壁 (南東から)
図版3	a. 第2号古墳調査前 (南東から) b. 同上 古墳墳丘 (南東から)	図版7	a. 第2号古墳基底石 (南東から) b. 同上 古墳掘り方 (南東から)
図版4	a. 第2号古墳墳丘断面 (南東から) b. 同上 古墳天井石 (南東から)	図版8	出土遺物(1)
		図版9	出土遺物(2)

1.はじめに

本発掘調査は、県営神石地区広域営農団地農道整備事業に係るものである。神石地区の主な農産業は、稻作・畑作（蒟蒻・煙草）・畜産（牛）で、県の地域農業振興の主要農業地帯にあたり、深い渓谷により数個の営農団地に区切られている。交通は、南北方向に国道・主要地方道等が通じているが、東西をつなぐ連絡道がなく、南北を縦走する道路が各谷沿いにあるのみで、道路配備の不良及び未整備が地域振興を阻害する大きな原因となっている。したがって本事業は、地区のほぼ中央部の台地上を東西につなぐ農道を配備して、国道182号線（福山～東城）及び県道三原～東城線に連結し、農業生産の近代化と農産物流通の合理化を企図して建設されることになった。

昭和55(1980)年11月、広島県福山農林事務所（以下「福山農林」という）から広島県教育委員会（以下「県教委」という）に対して、県営神石地区広域営農団地農道整備事業予定地内における埋蔵文化財の有無並びに取り扱いについて照会があった。県教委はこれを受けて現地踏査を行い、予定地内に高塚山古墳群内の高塚山第1・2号古墳が存在する旨回答した。本古墳の取り扱いについて、その後県教委は福山農林と協議を重ねたが、現状保存は困難であるとの結論に達し、事前の発掘調査が必要である旨を福山農林に通知した。昭和60(1985)年8月、福山農林は、財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という）に発掘調査を依頼した。センターでは、すでに本年度の事業を進めており、年度内の新たな追加事業は不可能であり、次年度以降で内部調整が出来れば可能である旨回答した。その後、昭和61(1986)年6月、センターは福山農林との間に委託契約を締結し、同年6月16日～9月5日までの約2.5か月間発掘調査を実施した。また、8月23日、神石町教育委員会と共に遺跡見学会を開催した。本報告書は、以上のような経過を経てその成果をまとめたものである。本報告書が学術研究のみならず、地域の歴史研究に少しでも寄与できれば幸いである。

なお、調査にあたっては県教委の御指導を得るとともに、神石町教育委員会、福山農林、及び地元の方々には多大なる御協力を得た。記して謝意を表したい。

2. 位置と環境

高塚山第1・2号古墳が所在する神石町は、広島県の北東部にあり、陸起準平原である吉備高原の西端通称神石高原に位置する。町内は、標高500m前後の高原面及びこの高原面を浸蝕する小河川から成る。これらの小河川は、町内の梅ヶ峠付近に分水嶺があり、東流する小河川は、岡山県に入って成羽川となりさらに高梁川と合流して瀬戸内海に注ぐ高梁川水系である。一方、西流する小河川は、上下川となり、馬洗川に合流して三次市付近で江ノ川となって日本海に注ぐ江ノ川水系である。

神石町内には、現在100か所以上の遺跡が確認されている。これらの遺跡のうち発掘調査によって内容が解明されているものは少ないが、町内における最も古い人類の生活の痕跡が知られているものに、昭和39(1964)年から広島大学が継続して調査を行っている帝釈観音堂洞窟遺跡がある。検出された遺物の大半は縄文時代のもので、現在は旧石器時代相当層の調査が行われている。このほか町内には、洞窟や岩陰遺跡が帝釈川及びその支流沿いに多数分布しており、本古墳群周辺でも、帝釈観音堂洞窟遺跡のほか、牛穴洞窟遺跡や一つ橋洞窟遺跡、天草洞窟遺跡などがある。

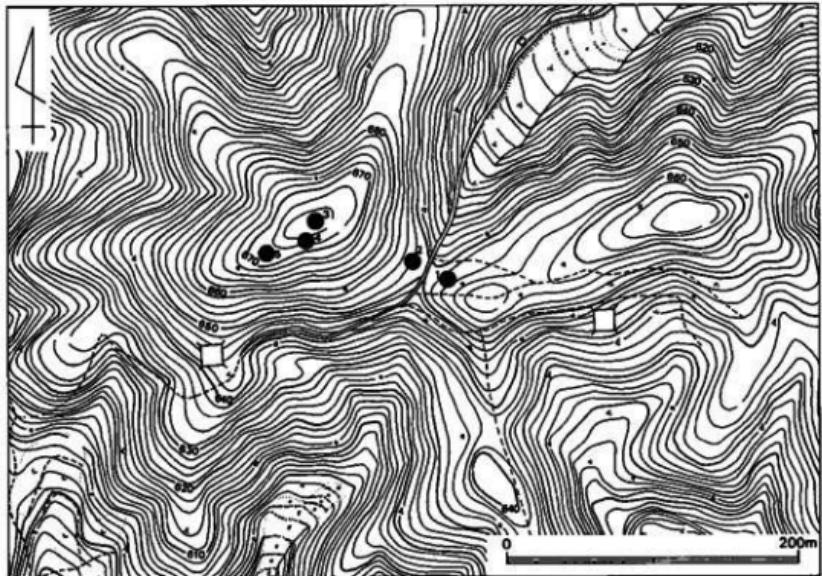
弥生時代の遺跡は、前述した帝釈観音堂洞窟遺跡の上層から土器が出土しているにすぎず、具体的な生活相を示す遺跡は今後の調査に期待される。

古墳時代の遺跡は、現在のところそのほとんどが古墳で径10数mの円墳である。小河川を単位とするグループに分けることが可能で、古墳集中の疎密の様子から6グループに分けられる。町内の南端では、殿迫古墳群を中心とする一群が存在し、田頭郷一帯を見下ろし竜王山から南東に派生した丘陵の先端部に占地している。町内の西端には田口古墳群と間谷古墳群があり、古川一帯を見下ろす丘陵上に位置する。この北側には吉ヶ迫古墳群・大日南古墳群が吉ヶ迫・板橋一帯の可耕地の縁辺部をとり囲むように存在する。さらに、この東側には、四ツ塚古墳群が小群ながら存在する。一方、町内の中央部には、八ツ塚古墳群が標高642mの山頂の主稜線上を南に下りた地点に存在する。町内の東側では高塚山古墳群・一駄岩古墳群・塚ヶ峠古墳群が高塚山から北東に派生する尾根上に存在する。これらの古墳群の成立時期については、不明な部分が多いが、古墳の約3分の1は横穴式石室を内部主体としており、概ね古墳時代後期墳と考えられる。また、これら古墳群内には、この地域を統括したとみられるような突出した古墳は見い出し難く、ある程度均質的である。このことは、当地域の古墳時代社会の展開の一端を示していると言えよう。



第1図 周辺遺跡分布図 (1:25,000)

- 1. 高塚山古墳群
- 2. 帝釈観音堂洞窟遺跡
- 3. 牛穴洞窟遺跡
- 4. 一ツ橋洞窟遺跡
- 5. 天草洞窟遺跡
- 6. 江草遺跡
- 7. 塚ヶ峠古墳群
- 8. 一駄岩古墳群
- 9. 草木城跡



第2図 高塚山古墳群位置図（1:4,000）

ところで、5基から成る高塚山古墳群は、標高675mの高塚山山頂部付近の主稜線上に3基（第3・4・5号古墳）が、山頂部から東に30m下りた尾根の鞍部に2基（第1・2号古墳）が存在している。第1・2号古墳については後述するので、ここでは第3・4・5号古墳について若干述べておく。第3号古墳は、直径約12m、高さ約2mの円墳である。山頂部平坦面に位置しており、現状での周溝等の様子は不明である。墳丘中央部に長さ3m、幅1m程の盗掘坑があり、比較的小ぶりの板状の石材が散乱している。内部主体は横穴式石室であろう。第4号古墳は、第3号古墳の南側約10mに位置し、直径約6m、高さ約1mの円墳と思われ、他の古墳に比べて規模は小さい。第5号古墳は、第3号古墳の南西側20mに位置し主稜線上にある。古墳の規模は、第3号古墳とほぼ同じである。墳丘中央部に盗掘坑があり、石材が散乱している。内部主体は横穴式石室であろう。

主要参考文献

松崎寿和編「帝釈峠遺跡群」 亜紀書房 昭和51(1976)年

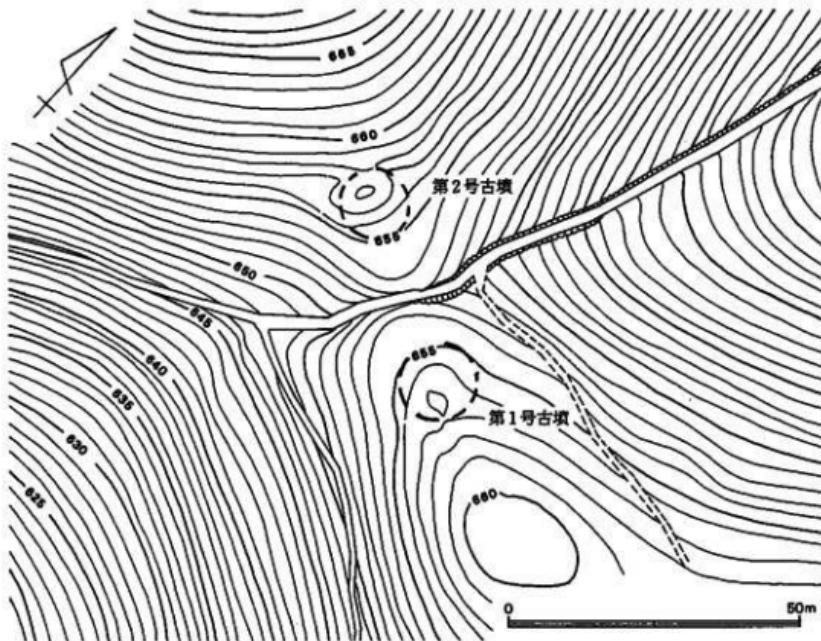
広島大学文学部帝釈峠遺跡群発掘調査室「広島大学文学部帝釈峠遺跡群発掘調査室年報Ⅰ」 昭和53(1978)年、他

神石町教育委員会「神石町古墳分布調査書」 昭和59(1984)年

3. 遺構と遺物

(1) 調査の概要

調査は、古墳の築造過程を解明するためできる限り広範囲に調査区を設定し、古墳築造に関する地山整形は全面にわたって、石室掘り方は、墳丘盛土をすべて除去し石室を解体して観察を行った。また、墳端の不明瞭な部分については、隨時小トレンチを設けて土層観察を行い確認に努めた。両古墳間のほぼ中央部に存在する平坦面は、古墳に伴う何らかの場と考えられるが、明確には出来なかった。調査の結果、第1号古墳は直径約13mの円墳で、内部主体が土壙墓、第2号古墳は直径約12mの円墳で、内部主体が横穴式石室であることが判明した。とくに第2号古墳では、前述の古墳築造過程をほぼ確認することができた。両古墳とも遺物量は少ないが、須恵器・土師器・鉄器・玉類などが出士している。

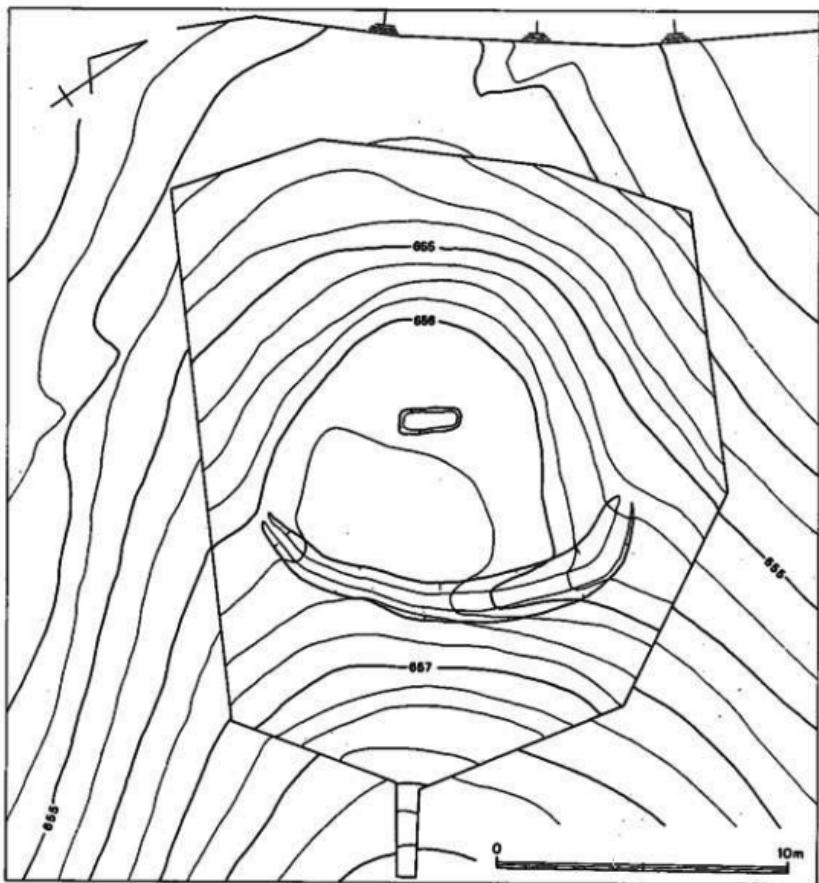


第3図 高塚山第1・2号古墳周辺地形図 (1:1,000)

(2) 高塚山第1号古墳

調査前の状況

本古墳は、西側に尾根がゆるく延びて鞍部となる付近に位置する。鞍部のやや平坦な所から見ると古墳の高さは2mぐらいあり、視覚的には実際以上の大きさに見える。なお、北側と南側の墳裾は、明瞭な区別がつけられなかったが、その規模については、直径12m程度の円墳と思われた。墳頂部の標高は約657mである。



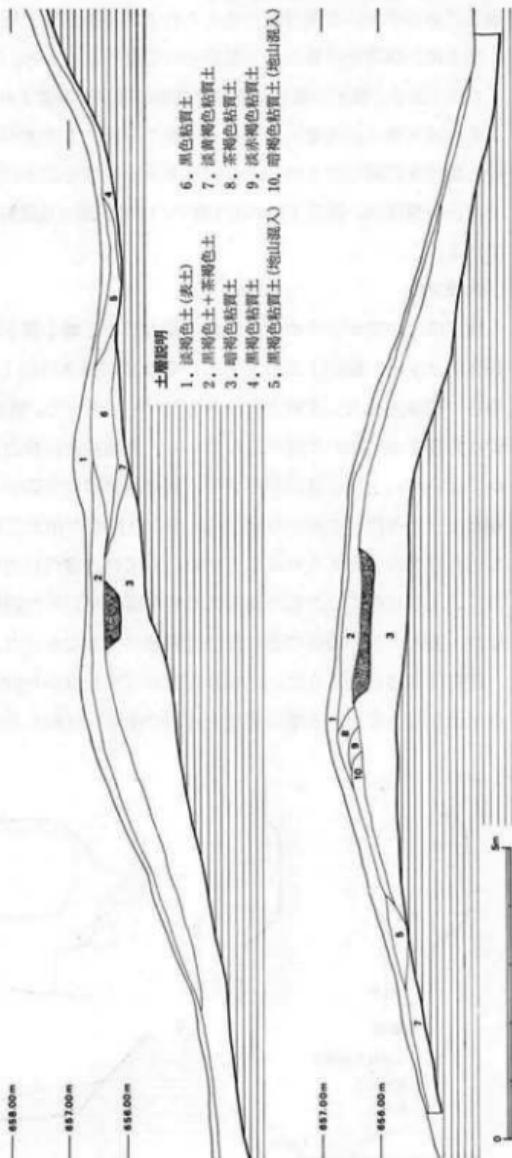
第4図 第1号古墳墳丘測量図 (1:200)

墳丘

古墳築造に伴う地山整形は、丘陵斜面の高い側（山側）を馬蹄形に1/3周する溝の掘削と墳丘基底面の整地作業の2つの工程から成る。

馬蹄形の溝は、標高656.40m付近を上端とし、丘陵の傾斜に沿って削り出している。その範囲は、全周するものではない。この溝を含めた墳丘の規模は南北約17m、東西約16mである。溝の底面は、最高所では標高657.10m、最も低い所で標高655.40mで、その差は1.7mとなり溝の高さは一定していない。したがって、溝の断面形も一定していないが最高所では逆台形をなし、幅2mである。

溝の内側は、前述したように平坦に整地しているが、南北方向は、傾斜に沿ってやや下っており、東西方向では、ほぼ水平となる。溝の内側の整地作業は、馬蹄形になる溝と谷側の墳端部の平坦面からの差が約1.4mであることや、地山と考えられる黄褐色混疊粘質土に顯著な加工がないことなどから、地山面までには



第5図 第1号古墳墳丘断面図 (1:100) (アミ目は主体部)

達しておらず地山の漸移層と考えられる黒褐色粘質土層までと思われる。

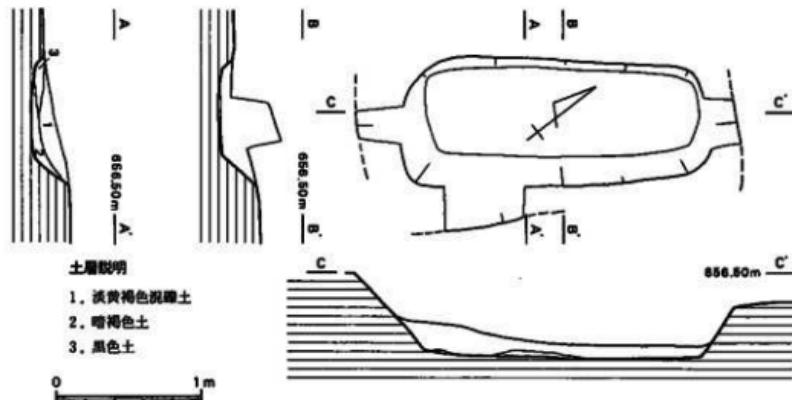
盛土は、溝内側の整地面を基底として盛られている。その厚さは、墳頂部で基底面から0.4 mである。盛土の量は、墳丘整地面の高さを考慮すれば流出土がある程度存在するにせよそれほど多くの土量ではない。このことは、本古墳が自然地形の尾根を馬蹄形の溝で切断し墳丘を区画したもので、これに多少の造作を加えたものといえよう。

墳丘の規模は、直径 13 m の円墳で、古墳前面（丘陵鞍部の平坦面）からの高さは約 2 m である。

内部主体

墳頂部の中央からやや西にずれて長方形の土壙 1 基を検出した。規模は検出面の上面で長さ約 2.5 m、幅約 1.2 m である。底面での長さは約 1.9 m、幅は北側辺で約 0.4 m、南側辺で約 0.5 m で、主軸方向は N 37°30' E であった。底面は平坦で中央部がわずかに窪み、壁は角度を 50~60° で掘り込んでいる。木棺痕跡は検出できなかったため、棺構造は明らかでないが、土壙の底面が平坦で、幅は南側がやや広いがほぼ長方形であること、墳内より出土した遺物は底面から約 10 cm 浮いた状態で出土したが、これは棺の腐朽に伴って落ち込んだものと考えられることから、本来は土壙内に木棺を埋置していたものと推定できよう。土壙は前述した整地面にある程度盛土を行った段階で掘り込まれたものと考えられるが、盛土のどの段階であったかは明確にできなかった。

遺物は前述したように、土壙の底面からやや浮いた状態で須恵器甕洞部片と鉄鏃が各 1 点出土した。また、土壙の南側上面端で密着し反転した状態で須恵器杯蓋が出土した。

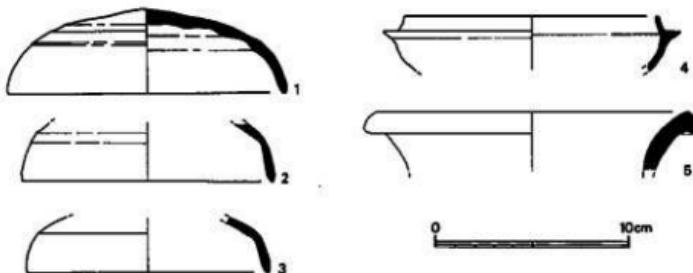


第6図 主体部実測図 (1:40)

出土遺物

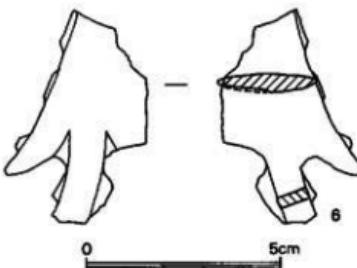
遺物は主体部及び墳丘表土中から出土している。その内容は須恵器片、鉄鎌である。また出土した地点は1・6が主体部、2～5が墳丘表土層中からである。

1～3は須恵器杯蓋である。1は口径14.4cm・器高4.3cmの完形品である。天井部は穹窿形をなし器肉は肥厚する。体部はゆるいカーブを描き口縁部へ続く。口縁部はやや外反気味に丸くおさめる。天井部から体部上半にかけてヘラケズリを施す。ロクロは時計回りである。色調は青灰色である。2・3は共に口縁部片で、復元口径はそれぞれ13.0cmと12.4cmである。どちらも体部中位でわずかに屈曲し、口縁部は直立気味となる。端部はやや尖り気味に丸くおさめる。色調は灰色～濃灰色である。4は須恵器杯身の口縁部片で、復元口径は13.0cmである。口縁部の立ち上りはやや斜上方に内傾し、端部を丸くおさめる。受け部は上外方に延び端部はやや尖り気味に丸くおさめる。色調は淡灰色である。5は須恵器甕の口縁部片で、復元口径は16.2cmである。口縁端部は下方に向かって拡張され端部



第7図 出土遺物実測図(1) (1:3)

を丸くおさめる。色調は淡灰色である。6は鉄鎌である。先端部及び片側の腸挟部、茎部を欠損している。現存長は5.4cm、刃部は両丸形で、茎部は鐵の中心線からやや片側に湾曲している。有茎腸挟三角形式の範疇にあたろう。

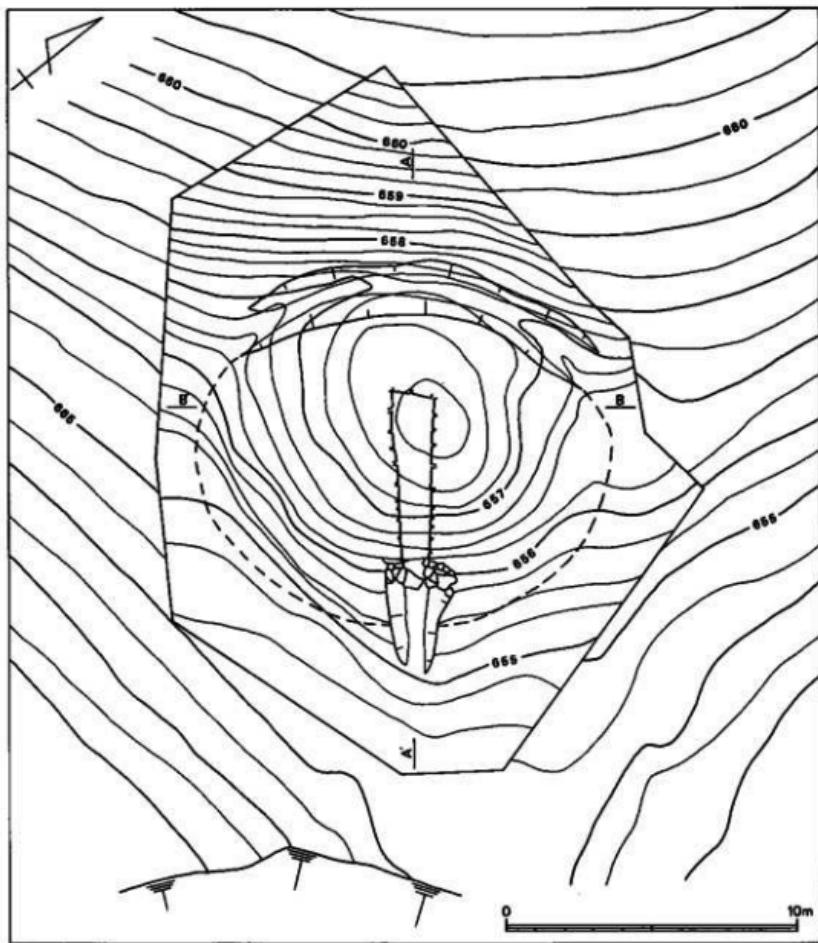


第8図 出土遺物実測図(2) (2:3)

(3) 高塚山第2号古墳

調査前の状況

本古墳は前述した第1号古墳の西側約30mに位置している。第1号古墳と鞍部をはさんで対峙している。墳丘西側に山道が存在し、これが調査区外の山林につづくことから本古墳の南西側の墳丘の一部はすでにこの山道の造作により削平されていると予想し



第9図 第2号古墳墳丘測量図 (1:200)

た。また、本古墳東側の墳裾付近に径約1mの擾乱坑が存在した。石室はすでに開口しており内部に相当量の流入土が堆積していた。また、開口部の前面にはやや平坦になる場所が存在する。

墳丘

本古墳は尾根の等高線にほぼ直交して石室を構築している。したがって尾根の高い方の側（山側）に1/3周する馬蹄形の溝の掘削と、この溝の内側での墳丘基底面の整地という2つの作業工程が主たる地山整形になる。

馬蹄形の溝は標高656.60mを上端とし、地形の傾斜に沿って削り出している。その範囲は全局するものではない。この溝を含めた墳丘の規模は南北約16m、東西約15mである。溝の底面は最高所では標高657.10m、最も低い所で標高656.50mで、その差は0.6mあり、溝底面の高さは一定していない。したがって溝の断面形は一定していないが概ねU字形で幅は2mである。

溝の内側はほぼ平坦に整地しているが、南北方向は傾斜に沿ってやや下っており、東西方向ではほぼ水平となる。これは本古墳が稜線よりやや南にずれているという地形的制約によるものと思われる。また墳丘基底面には旧地表の痕跡を見い出し得なかった。

盛土は溝内側の整地面を基底にして盛られている。盛土は古墳の築造過程に合わせて次の三段階に大きく分かれる。第1段階は石室の構築作業と合わせて行われる石室の壁と掘り方の間隙を埋める裏込め作業である。第2段階は天井石架構終了後に行われる天井石の被覆と墳形を整える作業である。第3段階は盛土で石室全体を覆い墳丘を整える作業である。

第1段階の裏込め作業は黄褐色粘質土と黒褐色粘質土を厚さ0.1～0.2mで互層にたたきしめて石室側壁上端まで行われている。この作業は石材の安定を図るために粘質土は丁寧にたたかれ、かなり堅固である。また、粘質土は帯状に延びており上述した二層を一単位としている。第2段階は天井石と天井石の間隙を小角礫で充填した後、主として黄褐色粘質土をたたきしめて天井石を被覆し、石室外方にゆるく傾斜しながら盛られる。この盛土もかなり丁寧にたたかれており、堅固である。こうして石室の安定を確保する二段階の盛土作業が終了した後、本古墳では古墳の墳形全体を整える盛土作業が行われる。この第3段階の盛土作業は黒褐色粘質土を主に用い、途中に黄褐色粘質土を楔状にかませて盛られている。古墳の墳丘は掘り方の底面から3.6mの高さがある。

なお、石室の東側の墳端付近で、連続して並ぶ3個の石を確認した。これが本来石列として並ぶ外護列石の名残りなのか、単に転落した石が偶然並んだものなのか判然としない。

内部主体

無袖の横穴式石室である。石室の主軸方向は N 49°30' E で、ほぼ南東方向に開口している。石室の現存長は約 6.3 m、幅は奥壁部で約 1.4 m、奥壁から 2 m の位置で約 1.2 m、同じく 4 m の位置で約 1.0 m、同じく 5.8 m の位置で約 0.8 m、開口部で約 0.9 m である。石室の平面形は入口部から奥壁部に向かって幅が広がっており、東壁は概ね直線的で、西壁は奥壁付近がわずかに胴が張って弧状になり、全体としては長台形となっている。西壁の腰石で奥壁から 7 番目は長方形の石を立てて使用しており、他の腰石に比べて床面下にかなり深く掘られていることなどから、この石で葬道と玄室の区別をしていたものと考えられる。

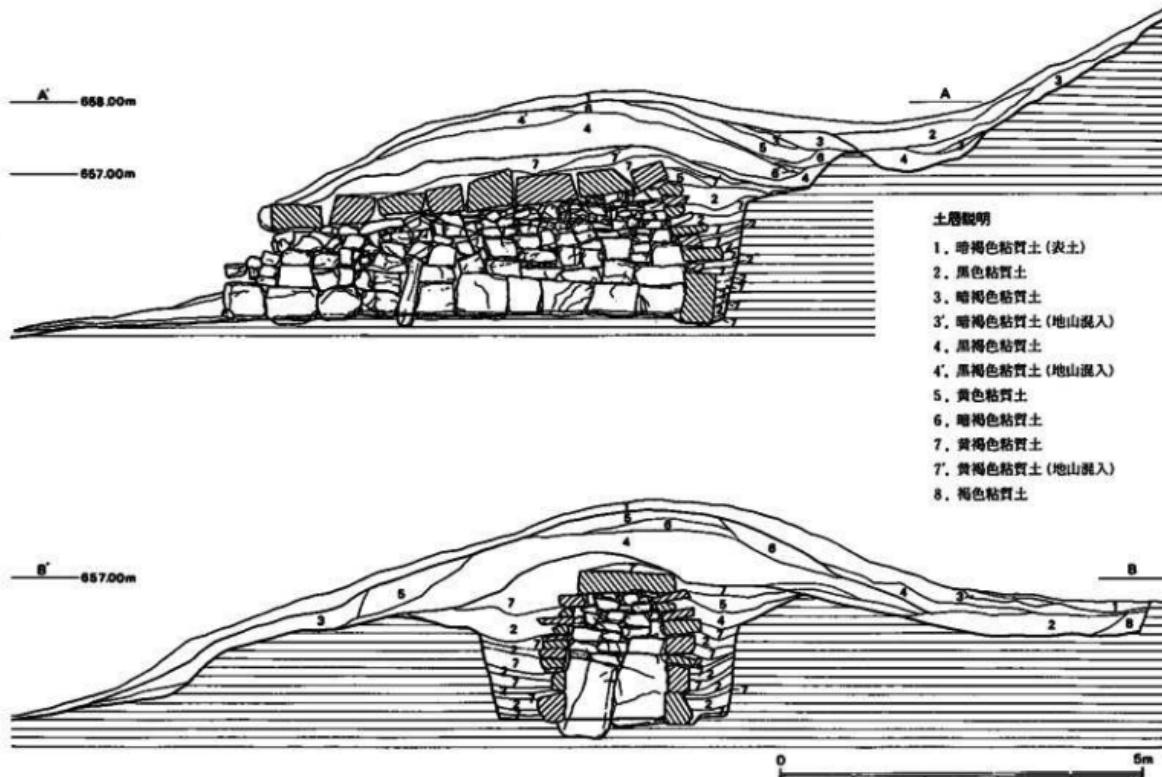
奥壁は比較的大きな板状の石材を 2 枚広口積みにしているが、左右の高さが不揃いである。これは左側の石材が右側の石材に比べて掘り方接地面の面積が少ないため、一段深く掘り下げて安定を図ったことによる。この不安定を解消するために左側の腰石の上に厚さ 0.15~0.2 m の角礫を横積みにして高さを合わせている。ここから同じくらいの厚さの石材を用いて 5~6 段持ち送り気味に内傾させて天井石に到る。床面から天井石までの高さは 1.8 m で、天井部付近ではいわゆる三角持ち送り気味の手法を用いている。

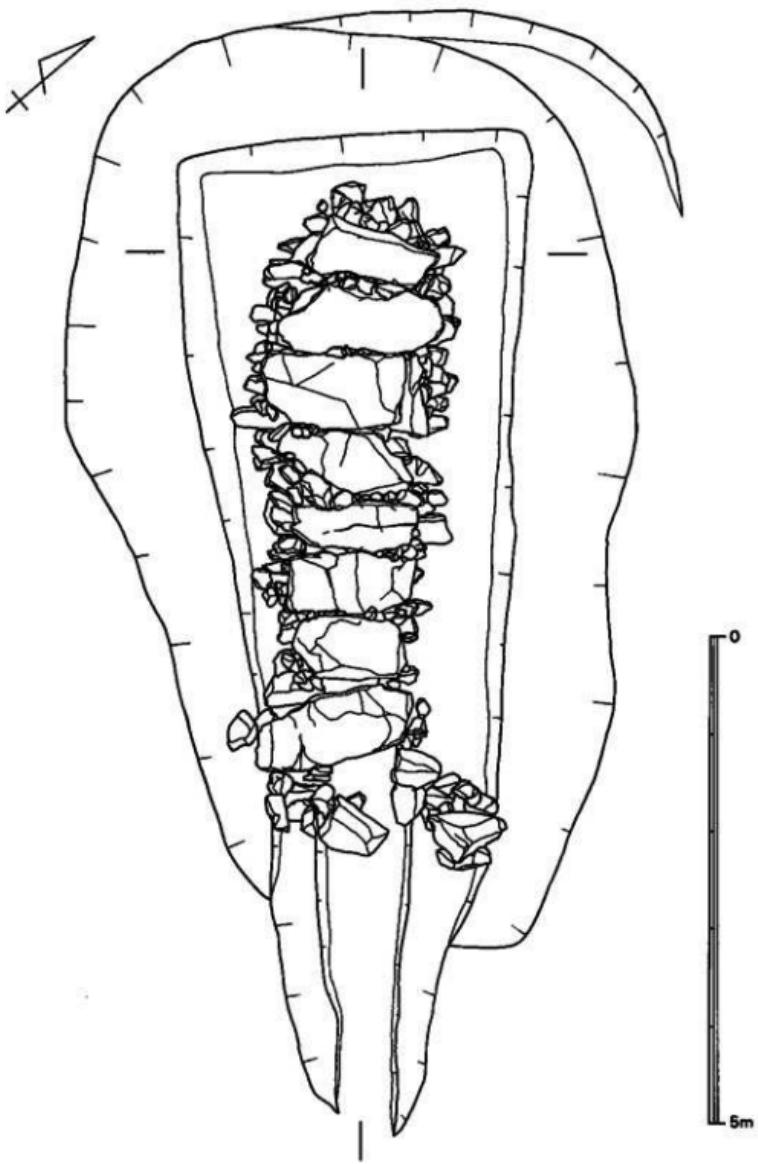
側壁は東壁が奥壁から約 6.4 m、西壁が約 6.6 m である。これは奥壁が石室主軸と直交せずややずれていることによる。なお、開口部の先端ではほぼ同じ位置となっている。東壁では腰石が 11 枚用いられており、腰石間の隙間を小礫でうめている。腰石の高さは全体として不均一で、とりわけ開口部付近の腰石は長方形の石材を立てて使用しており異質な感じを受ける。腰石から 2~3 段目までは比較的大きな角礫を使用しているが、天井部に近づくにつれて小さな角礫の小口面を整えながら持ち送りに積んでいる。角礫間の隙間に小さな角礫を噛み合わせるように充填している。東壁は西壁に比べると石の各段の上面の高さが不揃いで、石材の選択・使用に西壁や奥壁ほどの厳密さは見うけられない。一方、西壁では東壁と同じく 11 枚の石材を腰石として用いており、奥壁から 5 枚目の腰石までは開口部に近づくにつれて石の上面の高さは高くなるが目地は整っている。また葬道部の腰石上面の高さも整っており、東壁ほどの違和感はない。腰石から 2~3 段目までは比較的大きな石材を用いて横積みもしくは広口積みにし、その上を比較的小さな角礫を 6~7 段小口積みにしている。天井部付近は持ち送り気味になっている。

東西両側壁の傾斜の度合いは腰石上 2 段目くらいまではほぼ垂直であるが、小口積みに石材を用いるあたりから内傾していく。この傾向は奥壁部にとどまらず石室中央部・石室入口部でも同様である。ただし奥壁部のほうが内傾の度合いは強い。

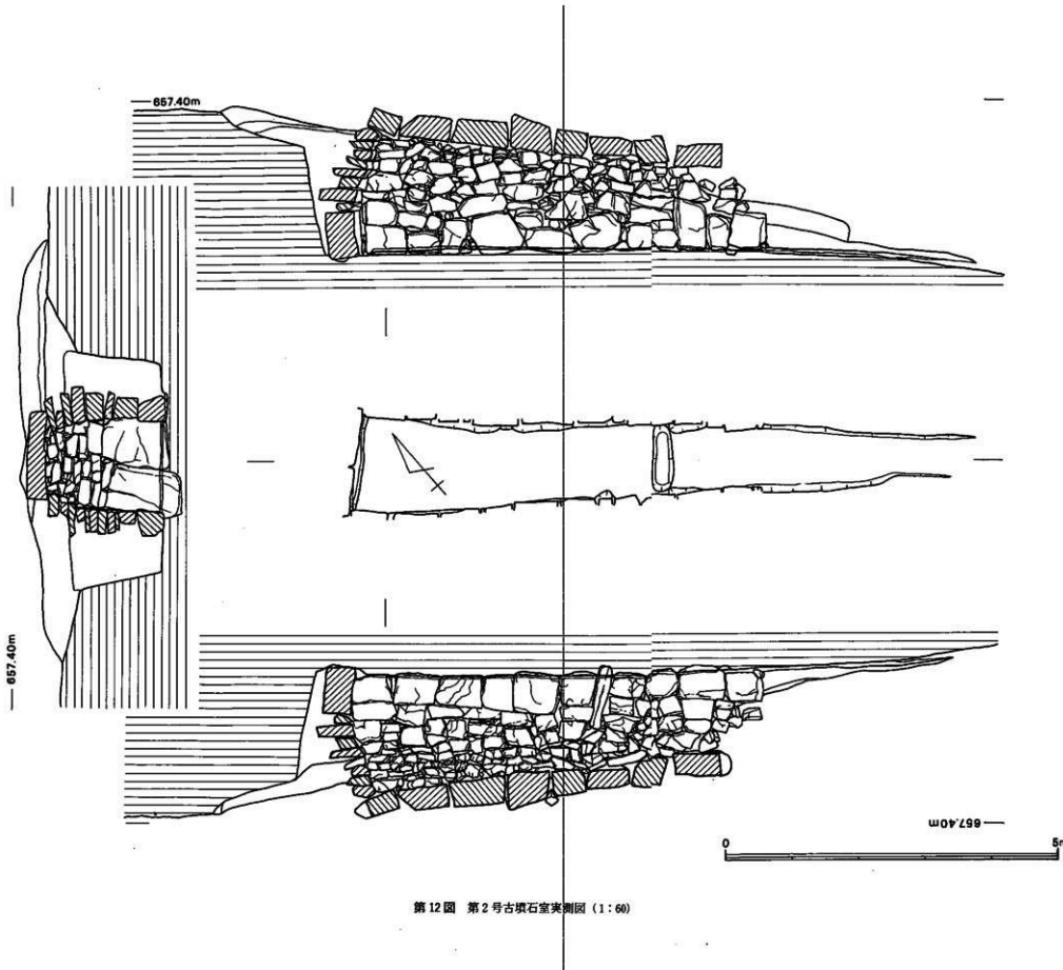
第10図 第2号古墳横丘断面図 (1:80)

— 13 —





第11図 第2号古墳石室天井石及び掘り方実測図（1:60）



第12図 第2号古墳石室実測図(1:60)

天井石は8枚残存し、天井石を架構した石室の長さは5.5mとなるが、石室前面に転落した天井石があたかも封鎖石の如く立った状況で存在していた。この石材は0.7×0.5×0.3mの板状のもので、この石材の幅を加え、側壁の長さを基に推定すると、石室の本来の長さは約6mと想定可能である。奥壁から8枚目の天井石すなわち現状で石室先端部の天井石がかなりずれていることや、石室前面部の側壁にかなりの崩落石があることなどからも、前述した石材は本来先端部の天井石が崩落したものと考えられる。天井石は奥壁から石室入口にかけてゆるく傾斜しその差は内法で0.6mである。天井石と天井石の間には小角礫を充填して盛土が石室内に流入するのを防いでいる。

石室床面は地山を大きく掘り込んでつくられ、敷石や土器床等の棺床施設はない。床面はほぼ平坦で奥壁から約5.3mの地点よりわずかに傾斜している程度であり、奥壁から約7mの地点より自然地形に移行する。遺物は床面付近から切子玉・耳環が出土した程度で、土器類は流入土中から出土したものを除くと、石室入口西壁付近から土師器高杯が出土したにすぎない。

石室掘り方

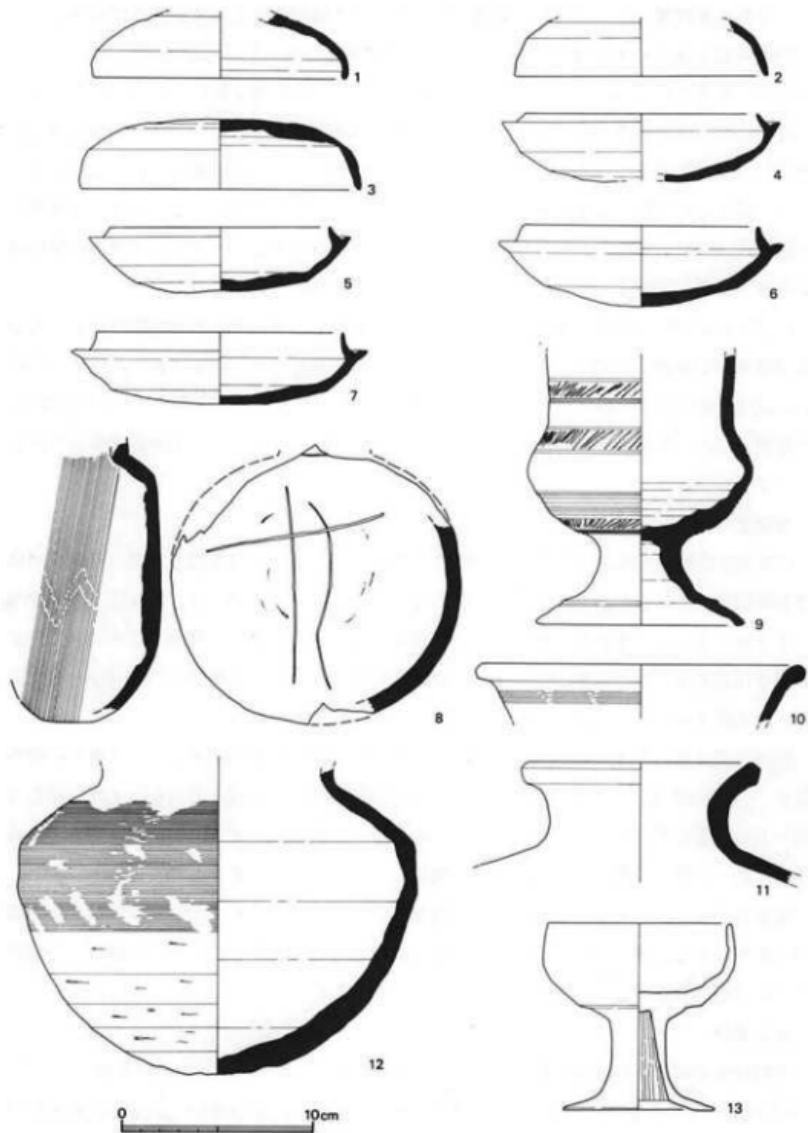
石室構築に使用された石材をすべて除去して完掘した。掘り方は整地した墳丘基底面のはば中央部を一段ゆるく掘りくぼめそこからほぼ垂直に掘り込んでいる。深さは石室奥壁部で1.6mであるが、整地面の傾斜に沿って順次浅くなり、天井石を構架していない部分での深さは0.8mとなる。掘り方の平面形は隅丸の長台形で、幅は奥壁部で約5m、石室入口付近で約4m、長さ11mとなる。

腰石は掘り方との間を0.3~0.4mあけて配され、腰石の配置にあたっては腰石の接地面を一段浅く掘り、一部はさらに一段掘り込んで石材の安定を図っている。また、腰石は掘り方の西側に若干ずれて配されている。このことや前述した東西両側壁の積み方の差異などから、石室は西壁に基準を合わせて構築したものと推定出来よう。

奥壁から4.5mのところで石室主軸に直交する長さ約1m・幅0.3m・深さ0.2mの溝が一条存在する。溝の端部が両側壁の腰石内側面とほぼ一致することから封鎖施設の痕跡である可能性が強い。

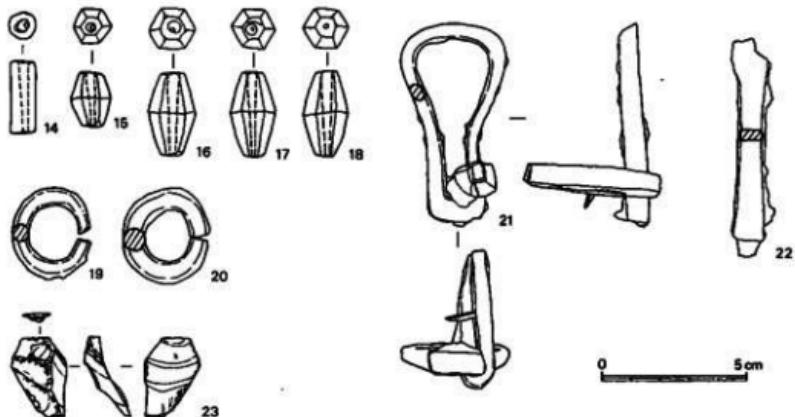
出土遺物

遺物はそのほとんどが墳丘表土層中からの出土である。1・13~20が石室床面から、2・5・9・21・22が石室前面から、8が石室内的堆積土中から、3・4・6・7・12・23が北東墳裾から、10・11が南側墳裾から出土している。なお出土遺物には須恵器・土師器・管玉・切子玉・耳環・鉄器・剣片がある。



第13図 出土遺物実測図(1) (1:3)

1～3は須恵器杯蓋である。1は杯蓋の体部片で復元口径 13.0 cm である。口縁部は垂直気味にのび、端部を丸くおさめている。色調は青灰色～淡灰色である。2は杯蓋の口縁部片で復元口径 13.0 cm である。体部中位でわずかに屈曲し口縁部に到る。口縁はやや外反しながらまっすぐ伸び端部を丸くおさめている。色調は灰色である。ロクロの回転方向は時計回りである。3は復元口径 14.4 cm である。天井部は平坦気味で体部につづき、強くカーブを描きながら口縁部に到る。口縁部は外方に直線的にのび端部を丸くおさめている。ヘラケズリは体部中位までおよび、ロクロの回転方向は時計回りである。色調は灰色である。4～7はいずれも須恵器杯身である。4は復元口径 12.0 cm である。立ち上りは斜め上方に内傾して直線的にのび端部を丸くおさめる。受け部は斜め上方外側に短かくのびる。底部から体部にかけてはゆるやかなカーブを描く。色調は暗灰色である。5は口径 11.4 cm の完形品で器高は 3.4 cm である。底部はやや凸凹しているが平坦である。体部はゆるくカーブし、立ち上りは内傾気味に直線的にのび端部はやや角ばる。受け部は外上方に短くのびる。ヘラケズリは底部から一部体部中位までおよぶ。内面中央部に一定方向の仕上げナデを施す。ロクロの回転方向は時計回り、色調は淡青灰色である。6は復元口径 12.2 cm である。底部から体部にかけてゆるやかにカーブする。立ち上りは内傾気味にのび端部を丸くおさめる。受け部は斜め上方にのび肥厚している。ヘラケズリは体部下位および、底部内面中央部には一定方向のナデを施す。ロクロの回転方向は時計回り、色調は暗灰色である。7は復元口径 12.8 cm で立ち上りはやや内傾して直線的にのび、端部は丸くおさめる。受



第14図 出土遺物実測図(2) (1:2)

け部は外上方にのびる。底部内面中央部に一定方向の仕上げナデを施す。色調は灰色である。8は提瓶の体部片である。口頸部を欠失している。体部中央に逆時計回りのヘラケズリをしたのちヘラ記号を施している。体部の一部に櫛齒状工具による丁寧なカキ目を施す。9は脚付壺である。脚部径は復元で10.8cmである。壺底部はやや丸味をおび、胴部がやや膨らみ頸部に到る。口頸部は直立気味にのびる。口頸部中位と肩部、体部下位を沈線で区画し、この区画帯の中を櫛状工具による右上りの刻目連続刺突文を施す。体部中位までカキ目がまわる。脚部はゆるやかに外に開き、端部から1.0cm上で段がつく。色調は灰色～淡灰色である。10は壺の口縁部片で復元口径16.4cmである。口縁は肥厚し丸くおさめる。口縁部直下に浅いカキ目がめぐる。色調は灰色から暗灰色である。11は横瓶の口縁部片で口径は11.4cmである。口縁はゆるく外反し口縁端部にいたる。頸部と肩部の接合部付近から内面には同心円状のタクキ目が、外面には平行タクキをした後カキ目が施される。色調は暗灰色である。12は壺で肩部最大径は20.7cmである。底部は丸く円弧状のカーブを描きながら肩部にのび強く屈曲して直線的になり、再び内側に強く屈曲して頸部に到る。ヘラケズリは肩部中位までおよび底面はナデ消している。胴部上半から頸部下半にかけて細かい櫛齒状工具によるカキ目がめぐる。内底面中央部に一定方向のナデを施す。色調は灰色で、焼成は不良である。13は土師器高杯である。遺存状態が悪く、器表の剥離が著しいため細かい点については不明な点が多い。杯底部は平坦で、体部は円弧状にのび、口縁部はやや内傾して端部にいたる。端部は丸くおさめる。脚部は直線的に垂直に下り脚端部付近でラッパ状に開く。脚柱内面には弱いケズリを施す。14は管玉で長さ2.5cm・径0.9cm・孔径0.1～0.4cm・重さ3.7gである。穿孔は一方向から行われている。15～18は水晶製切子玉ですべて一方向からの穿孔による。15は長さ1.9cm・幅1.3cm・孔径0.1～0.3cm・重さ4.2g、16は長さ2.9cm・幅1.5cm・孔径0.1～0.4cm・重さ8.6g、17は長さ2.9cm・幅1.6cm・孔径0.1～0.4cm・重さ2.9g、18は長さ2.9cm・幅1.6cm・孔径0.1～0.4cm・重さ7.5gである。19・20はともに耳環で断面は円形、中実の銅胎が露出している。19は長径3.0cm・短径2.7cm・厚さ0.6cm・重さ8.8g、20は長径3.3cm・短径3.0cm・厚さ0.8cm・重さ12.9gである。21は鉗具で長さ6.8cm・幅3.6cm、円金具は1/3が残存する。22は鉄錠の錠身部片である。現長7.5cm・幅1.2cm・厚さ0.4cm・重さ10.2gである。断面は台形である。23は黒曜石の剝片である。背面及び腹面に一部微細な剥離痕がある。打点の上面は背面側から折損している。長さ2.7cm・幅1.9cm・重さ2.3gである。

4. ま　　と　　め

高塚山第1・2号古墳の遺構・遺物については、前述した通りである。ここでは、調査で明らかになったことがらについて若干の整理を行い、まとめにかえることとした。

立地と群構成

今回調査した2基の古墳は、向い合うように尾根の鞍部に位置している。このような占地の仕方は、約30m上方の山頂部の平坦部に占地している高塚山第3・4・5号古墳とはいささか異質な感を受ける。すなわち、高塚山古墳群は、鞍部の2基と山頂部の3基の2支群に分けることができる。周辺の古墳群の分布状況についても一駄岩古墳群(2基)・塚ヶ峠古墳群(3基)も概ね2~3基の単位で構成されており、これらの古墳群も内部主体が横穴式石室であり、古墳時代後期になって成立したことが知られている。

これらの古墳群は、群単位としては最小規模であり、各々は血縁的に密接な関係にある集団を単位として築造されたと推定されよう。また、立地に関して、後期古墳がこうしたあり方をすることは、この地域の開発と密接な関わりがあったと推定できよう。丘陵及び山頂付近に築造された高塚山古墳群は、四方を眺望でき、とくに北及び南の谷水田がこの古墳群の付近まで営まれている現状は、付近に古墳時代後期の集落跡が現在確認されていないが、この地域の当時の谷水田経営のあり方を示唆している。このようなことから、本古墳群の西方及び南方には現在のところ古墳は確認されていないが、将来新たに古墳が見つかる可能性がある。

築造年代

第1号古墳は、土壙(木棺墓の可能性あり)1基を内部主体とするもので、壙内から鉄鏃と須恵器片が、土壙南側上端付近から須恵器杯蓋が出土している。これらの遺物から第1号古墳は、6世紀後半頃に築造されたものと推定できる。

第2号古墳は、横穴式石室を内部主体とするもので、遺物は床面からはほとんど出土していないが、狭道につながる壙掘周辺及び壙丘上から須恵器片・鉄器等が出土している。とりわけ、狭道部前面から出土した遺物は、追葬時に整理された遺物である可能性が強く、この出土遺物から大まかな築造年代を決めることができる。つまり、第2号古墳の築造年代は、須恵器の特徴から6世紀後半頃と推定できる。

以上のように、第1号古墳と第2号古墳は、ともに6世紀後半頃の築造と考えられる。ところで広島県におけるこの時期の埋葬施設は、木棺や石棺などに替って横穴式石室が広

く普及する時期である。すなわち、第1号古墳を除く本古墳群や周辺の古墳の埋葬施設が横穴式石室であることは、当地域においても一般的であったことを示唆しており、第2号古墳の成立がやや後出すると考えられよう。なお、両古墳の立地からすると、第2号古墳の築造は、第1号古墳の存在を意識して選定したものと考えられ、両古墳の被葬者は、血族関係であるなど密接な繋がりにあったことが推定される。

内部主体

ここでは、第2号古墳の横穴式石室を中心とりあげることにする。本古墳の横穴式石室は、板状もしくは長方形の石材を面の広いほうを石室の内側に向けて腰石として使用し、その上側の石は、基本的には石材小口面を石室内側に向けて持ち送りし天井石を構架することを特徴としている。石材は、比較的小型のものを多用しており、このことは、古墳の立地とも関連して大型の石材の入手・運搬が困難であったことによるものと考えられる。

一方、封鎖施設は明確には存在せず、墳丘外に板状の石材が10数個投げ出されたような状態で1か所に置かれていた。これが、追葬時の整理によるものかどうかは判然としない。ところで、石室主軸にほぼ直交する溝が一条存在し、これが封鎖施設の掘り方と考えられる。板状の石材もしくは木材を両側の腰石に挟み込むようなかたちで立てて封鎖施設を形成していた可能性が強い。

出土遺物

遺物は、大半が墳丘からの出土で、両古墳とも内部主体に伴う遺物は僅少である。これらの遺物のうち須恵器に関しては県内における既存の変遷観からみれば、概ね6世紀後半頃として妥当である。また当該期の古墳から馬具類の一部が少なからず出土することや、第2号古墳出土の装飾性の強い須恵器(9)は県内では6世紀後半から7世紀中頃に特徴的に出現することなど、須恵器以外の遺物からも前述した両古墳の年代観は首肯できよう。

結語

神石町内の古墳は、現在のところ85基が確認されており、今後この数は増えるものと考えられる。これらの古墳は、おおまかに6つのグループに大別でき、これらの古墳群の中で他に比べて異質な内容をもつものは今のところ発見されておらず、均質的でその多くが後期古墳に属する可能性が大である。このようにみると、町内では、この時期少なくとも6以上の均質的な地域共同体が、平地及び狭小な谷水田の経営を通じて成立・展開していたことが推定できよう。いずれにせよ、神石町内の古墳はそのほとんどが調査されていないため、古墳群の形成・動向の実態については不明瞭な部分を残すところが多く、今後の調査により本古墳群の位置付けがより明確になるものと考えられる。



a. 第1号古墳調査前（北西から）



b. 同上 古墳墳丘（北西から）

図版2



a. 第1号古墳主体部（南東から）



b. 同上 古墳調査状況（北西から）



a. 第2号古墳調査前（南東から）



b. 同上 古墳墳丘（南東から）

図版 4



a. 第2号古墳墳丘断面（南東から）



b. 同上 古墳天井石（南東から）



a. 第2号古墳天井石（北西から）



b. 同上 古墳奥壁（南東から）



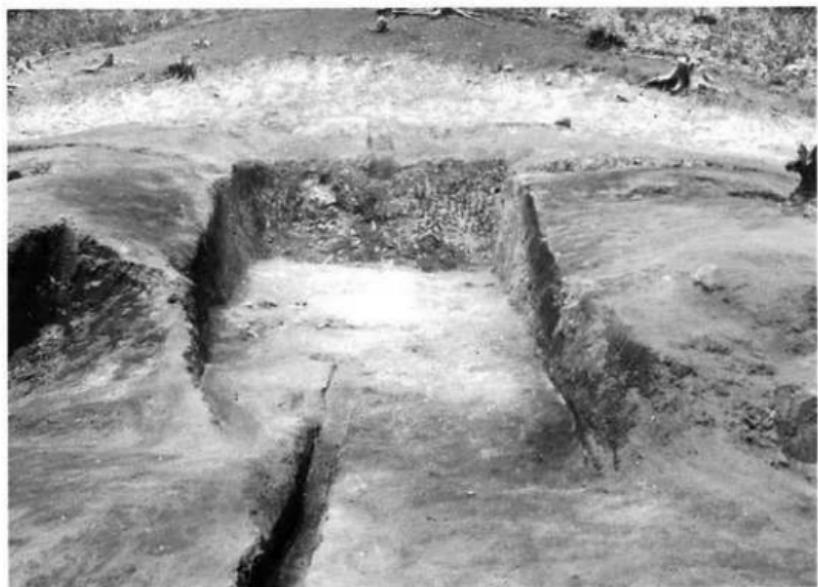
a. 第2号古墳天井石除去後（南東から）



b. 同上 古墳側壁・奥壁（南東から）

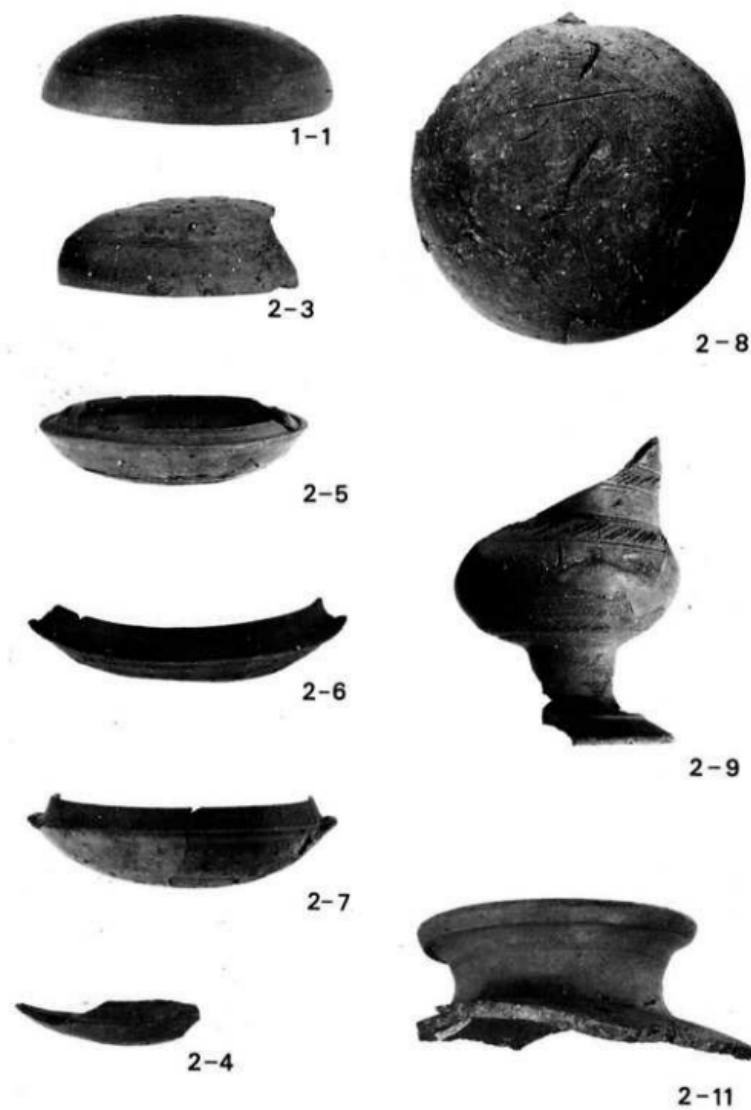


a. 第 2 号古墳基底石（南東から）



b. 同上 古墳掘り方（南東から）

図版 8



出 土 遺 物 (1)



2-12



2-13



1-6



2-23



2-14



2-15



2-16



2-17



2-18



2-19



2-20



2-21



2-22

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 第64集

高塚山第1・2号古墳発掘調査報告書

発行日 昭和62(1987)年3月

編集・発行

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

〒733 広島市西区観音新町4丁目8-49

TEL (082) 295-5751

印刷所 電子印刷株式会社